

鷲見郷から高鷲へ拓く力(1)

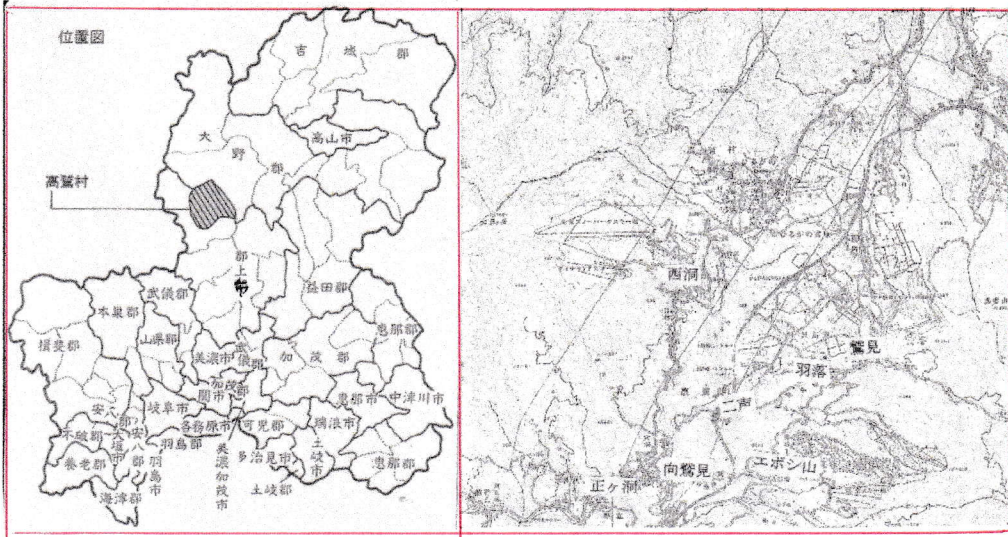
【馬淵 作成】

この度『会報 高鷲の文化財』が 100 号近くになりましたので、高鷲がどのように発展してきたか、人々が村を切り拓いてきたかをまとめてみましたので、会員の皆様に紹介します。【今後数号は『鷲見郷から高鷲へ拓く力』という歴史記録を報告します。

1 鷲見郷のある所と地形と気候

鷲見郷は、岐阜県の北西部にあり、長良川の水源地帯にあって、東と北は高山市荘川町、南と西は郡上市白鳥町に接しています。奥美濃地方と言われる郡上市の一番北部に位置しています。東に鷲ヶ岳(1671m)、西に大日ヶ岳(1708m)があって、北にひるがの高原、上野高原、南に明野高原があります。長良川は鷲見郷の中央部を流れ、そこに鷲見川、切立川、などいくつかの支流が流れ、それらの川に沿って小盆地や段丘上の耕地が点在している山村です。村の東西の長さは11.5km、南北13kmで、総面積百3.68平方kmであります。

気候は、東海地方と北陸地方の境目にある奥美濃の高い位置にあるため、夏は涼しい雨が多く、冬は寒さが厳しい所です。年平均気温は11.5度、最高気温は24.2度で、最低平均気温は零下1度で、1年間に降る雨の量は3249mm近く、11月末から4月上旬までが積雪期間となっています。



岐阜県郡上市高鷲町は、明治29年(1896)に鷲見四郷が合併して高鷲村となりました。長良川の源流で鷲見頼保公の鷲退治伝説があることから村名が名付けられた奥美濃地方の山村です。平成16年(2004)に郡上郡7ヶ町村が合併して郡上市となりました。承久の乱後入部してきた。東氏は鎌倉幕府の新補地頭であり、それ以前の本補地頭としてこの郡上北部一帯を治めていたのが鷲見氏であります。そこで鷲見郷から高鷲への土地に関する歴史がどのように発展してきたか、村民の拓く力を中心に考察しました。

2 古代から中世

奥美濃の山深いところに、大日ヶ嶽と雲ヶ嶽と言う二千m弱の高山があります。その麓は縄文時代から人々が住み、狩猟・採集生活をしながら集団で生活していました。その跡が鷲見地区や向鷲見地区、鮎立地区に縄文遺跡として残っています。彼らは狩猟しながら生活し、時が経つと焼畑をするようになり、生活は安定して人口も増加していきました。

大化の改新によって氏族的な土地所有制度は解体し、農民の大部分は国家所有の公民となり、氏族の所有していた土地は口分田と云って国家の手で公民に班給されました。

奈良時代の初め、白山を開山した泰澄大師が^{たいちようだいし}大日ヶ岳から蛭ヶ野を通り、白鳥前谷に下りられた時、大日ヶ岳に大日如来を祀られ（717年）、麓の高原を通った時、湿地帯でヒルが多く、身体中に喰われましたのでこの地を蛭ヶ野と名付けられました。そこから西方に集落が見えるので西洞と名付け、白鳥めがけて下りられました。途中最初に人の住家があるので正ヶ洞と名付け、さらに、そこから霧が沸き立つ麓に集落があるのに気がつかれて切立（霧立）と名付けられて白鳥の長瀧神社に向かわれましたという。

平安時代の初期になると、郡上郡は延喜格式の改訂により、武儀郡から独立しました。丁度その頃、鮎走、切立、正ヶ洞、向鷺見、中切、穴洞、西洞、鷺見の八か村を号して鷺見郷というようになったそうです。また平安時代の中頃になると、関東で平将門が反乱を起こしたので、親類の左衛門尉平良忠が下総国（現千葉県）猿嶋郡上井郷からのがれ、今の伏兵ヶ野に終の屋燭（敷）を構え、名を山河と改め、現在は、切立明野に居住したそうです。その家来の中に才三郎という者がおり、雲ヶ嶽の麓に身を隠すようにして狩猟と焼畑をしながら生活を立てていました。

荘園の増大と、貴族が人の言いなりになる主体性のなさのため、中央政府の権力は地に落ち、地方豪族はその力を頼み、荘園の争奪が起こり、源平の二つの勢力となりました。特に平氏は武家の棟梁となりましたが公家化して社会を支配する力を失い、源氏が鎌倉幕府を創設して封建制度が始まりました。

丁度その頃（平安時代末期）になると都から鷺見郷へ鷺退治に^{むさしごんのかみ}武蔵権守という人物が来て、鷺退治をしたという伝承があります。高鷺村に伝わる「鷺見大鑑」（裕孝司所蔵）によると次のように書いてあります（要約）。

「ある時、美濃の山間に大鷺が棲むことが天皇の耳に入り、頼保に鷺狩りを命じた。頼保は美濃国郡上郡雲ヶ嶽（後の鷺ヶ岳）に於いて大鷺二羽を退治し、鷺の子二羽を生け捕りにしてこれを天覧に供したので、賞として家名を鷺狩りにちんで鷺見姓を賜わって鷺見頼保と名乗り、鷺見郷を永代下賜された。この鷺狩りの時、岩高村の小左衛門と山口才三郎が頼保を助けたので、岩高村を向鷺見村に、才三郎の在所を鷺見村と呼ばれるようになった。」

頼保の鷺退治の話は伝説ですが、鷺見氏のことが史実として明らかになるのは、頼保の子で郡上太郎といった重保からです。正ヶ洞の長善寺文書によると、建仁年間（1201~4）に美濃国岩滝郷の小島三郎が濫妨したので、将軍は北条時政に命令して重保の所領を認めさせた。この下知状の袖書に、この重保は相伝の御家人であるとあり、鷺見氏はこの時期に鎌倉幕府の御家人として鷺見郷を相伝していたことがわかります。重保の子家保は武勇に優れ、承久の乱（1221）には幕府軍に従軍し、軍功により鷺見郷の下司として安堵状を得た。そして、向鷺見に鷺見城を築いたのもこの頃であります。家保の子保吉・諸保は、弘安八（1285）年に京都大番役に任ぜられ上洛しています。その時下賜されたのが、太平壺ですが、現在は所在が分かっていません。



鷺見氏の栄華を偲ばせる鷺見城址 ^{たぐさ}

元弘3（1333）年足利尊氏の六波羅攻撃に従軍して軍功を上げた鷺見忠保は、建武2（1335）年尊氏が武家政治の再興を図って後醍醐天皇に反旗を翻したときも、足利尊氏について各地を転戦して軍功を上げている。

南北朝時代に入り、足利尊氏と直義兄弟が対立した観応の擾乱に際しては忠保の弟、鷺見保憲が直義の招きに応じたのに対し、忠保の子の加賀丸は守護の土岐氏に従って尊氏方につき、一時鷺見氏は一族で敵対することになった。明德2（1391）年の明德の乱の時、幕府が美濃の守護土岐康行を討伐した。その時鷺見加賀丸は軍功を賞されて鷺見郷河西・河東の地頭職を安堵されている。このころが鷺見氏の全盛で鷺見氏の所領は、鷺見郷の外、東前谷、牛道郷の一部、越前穴馬の一部に及んだ。

14世紀頃には鷺見氏は衰えはじめ、二日町城主安東三郎氏世に、鷺見郷をおし取ろうとする事件が起り、鷺見氏保が安東軍をしりぞけた。